方丈記の草庵生活における美文の意義

――「心澄む」に関連して――

岡山高博

一　はじめに

鴨長明の『方丈記』は、漢文体の「記」の文章形式、とりわけ、慶滋保胤『池亭記』をはじめとする「家居の記」に範を仰いで書き上げられた。そもそも「記」とは、事柄を客観的に記録した文章のことで、唐代に隆盛を迎えてから文体の一つとして独立し、その後は作家自身の議論を交えるようになったという。(1)

しかし、ここで注意すべきは、建長四年（一二五二）成立の『十訓抄』が「方丈記とて、仮名にて書き置けるもの」(2)と言及するように、本来、漢文体で書くはずの「記」を、長明がわざわざ和漢混淆文体の「記」に変更して書いたことである。新しい文体を創出して「記」を書く営みが、長明の表現者としての意欲的な試みであったことは想像に難くない。そうした『方丈記』の表現の特色について、浅見和彦「方丈記の文体――作品論への手掛かりとして――」は「漢文訓読体にその骨格を置きながらも、漢字の使用を極端にさしひかえ、漢文訓読語や訓読特有の言い回しを嫌い、逆に和語、歌語を積極的に織り込み、和歌的な用語や発想を大胆に見せるという、すぐれて和文的なものなのである」(3)と指摘している。

とはいえ、『方丈記』を通読するに、前半の五大災厄では、都人とその住居の滅亡が迫真の筆致で記されるのに対し、後半の草庵生活では、閑居の情趣が先蹤の和歌や漢文の表現を踏まえた美文によって描き出されており、その印象は大きく異なる。この点については、すでに佐々木八郎「方丈記私論――「構造と意味」「叙実と抒情」――」が「彼は忌むべきものとして捨てた現実の社会を語る場合はリア

リスティックな態度であり、今楽しんでいる逃避の世界は、さながら情趣的なものとして抒情的発想の中に彼自身が陶然となった」と述べ、「『方丈記』に見られる叙実と抒情を、どのように理解すればよいのであろうか」と問題提起していた。[4] 長明の体験した「世ノ不思議」が事実であることを強調する前半が叙事的なのは理解しうるとして、「閑居ノ気味」を述べた後半に美文が多用されるのはなぜか。

本論では、新古今歌人であり、遁世者でもあった長明が『方丈記』後半の草庵生活を美文調の文体により表現したことの意義をあらためて問い直したい。その上で、『方丈記』の前半と後半との関係性についても考察を加える。

二　草庵の四季

まず、『方丈記』後半において、日野山の草庵生活をめぐる四季折々の情趣を美文に綴った一節から検討を始めたい。

春ハ藤波ヲ見ル。紫雲ノゴトクシテ、西方ニ、ホフ。夏ハ郭公ヲ聞ク。語ラフゴトニ、死出ノ山路ヲ契ル。秋ハヒグラシノ声、耳ニ満テリ。ウツセミノ世ヲ悲シムホド聞コユ。冬ハ雪ヲアハレブ。積リ消ユルサマ、罪障ニタトヘツベシ。[5]

長明はここで『方丈記』の先蹤作品である『池亭記』の「いはんや春は東岸の柳有り、細煙嫋娜たり。夏は北戸の竹有り、清風颯然たり。秋は西窓の月有り、以て書を披くべし。冬は南簷の日有り、以て背を炙るべし」[6] を踏まえつつ、和歌世界の題材や発想を利用することにより、庵の春夏秋冬を巧みな仮名文の対句表現に仕立て上げている。

春は「藤波」を聖衆来迎の際に「西方」にたなびく「紫雲」に見立て、夏は「郭公」の異名である「死出の田長」から「死出ノ山路」を想起し、秋は「ヒグラシ」の声に導かれた「空蟬」と「現せ身」の掛詞により無常の悲しみを聞き、冬は「雪」の「積リ消ユルサマ」を人間の「罪障」と懺悔の関係に譬える。

この四季の描写では、『池亭記』における漢詩的自然観を和文の「記」に相応しい歌語を用いた表現に改変し、さらに王朝的な四季の美意識を遁世者に相応しい仏教的主題に転換した点に特異性がある。四季と仏道との関わりは、たとえば『発心集』巻三ノ九話において、年を取った木こりが出家の決意を語る場面に、

十歳ばかりの時、譬へば春の若葉なり。二三十にて盛りなりし時は、夏の梢かげしげりて、心地よげなりし比に似たり。今、六十にあまり、黒髪やや白く、しはたたみ、肌へ変り行く。即ち、秋の色づくにことならず。未だ嵐に散らずと云ふばかりなり。[7]

と見える。ここでは、生まれてから成長し、壮年期を迎え

て、老いてゆく人生の段階が四季の変化に重ねられるとともに、この木こりが六十歳という年齢を人生の秋として捉えていることがわかる。『方丈記』でも「六十ノ露消エガタニ及ビテ」「一期ノ月影カタブキテ」の如く、長明が人生の老いについて繰り返し言及している点が重要で、草庵の四季が阿弥陀仏の来迎や冥土への道行き、この世のはかなさなど、死後の世界に傾斜して表現されるのは、それが死を覚悟した遁世者の心境に深く結びついているからであった。

また、右に引用した『方丈記』の一節の直前に「谷シゲ、レド、西晴レタリ。観念ノタヨリナキニシモアラズ」と見えることから、ここは仏教的観想に到達するための手段として、和歌の題材である四季の景物が選び取られたと考えられる。そこで『発心集』巻六ノ九話に説き示される「数奇」の効用を参照するに、

中にも、数奇と云ふは、人の交はりを好まず、身のしづめるをも愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも顕はれ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に侍るべし。

とある。ここでは、「花」や「月」など歌に詠まれる代表的景物を「心を澄まして」観照すれば、おのずと無常の摂理も感得されて、出離解脱の契機になるという。『方丈記』でも、草庵をめぐる四季の移ろいが「藤波」や「郭公」などの歌語を用いた美文によって、仏教的な色彩を濃厚に帯びて表現されており、それは遁世者の「心」の清澄な境地から見つめた風景なのであった。

ところで、現実の美しい景色を「心を澄まして」見ることにより、経典の哲理や浄土的風景を感得しようとするのは、必ずしも長明に始まったわけではない。たとえば、常盤三寂の一人寂然の『法門百首』(8)一番歌の「春風に氷とけ行く谷水を心の中にすましてぞみる」は、『摩訶止観』巻第一下「無明転即変為明、如融氷成水」（無明は転ずればすなわち変じて明となる、氷を融かして水となすがごとし）に基づく法文題「無明転為明如融氷成水」の趣意を、新年が明けて、春風に氷解する谷川の水という現実の風景から感得したことを詠んだもので、寂然自身がこの歌に付したという左注末尾には「すまして見るといへる、この心なるべし」（以下、傍点筆者付記）とある。(9)また、二番歌の「鶯の初音のみかは宿からにみなつかしき鳥の声かな」は、『阿弥陀経』「是諸衆鳥、昼夜六時、出和雅音」（このもろもろの鳥、昼夜六時に、和雅の音を出す）を用いて「是諸衆鳥和雅音」を法文題とし、鶯の初音をはじめ様々な鳥の鳴き声を、極楽にいる鳥の妙なる囀りに重ね合わせる。こうした和歌の伝統的表現と経典世界、宗教的観想との深

い結びつきは、『方丈記』[10]の四季の描写にも影響を与えていると考えてよいだろう。

その一方で、新古今時代における法文歌の中核をなす『法門百首』の試みを、純粋に散文作品の形式で成し遂げようとした点に『方丈記』の斬新がある。『方丈記』の文章が、多くの先行する和歌に依拠して綴られているにもかかわらず、長明がその本文に歌の一首全体をそのまま引用することはない[11]。つまり、漢文体の「記」を和文に変更する中で、見立てや掛詞などの和歌の修辞技巧を存分に駆使した、あくまで仮名文の対句により、長明は草庵の四季の美景を仏道の信仰世界に重ね合わせたのであった。

三　草庵生活と〈数奇〉の系譜

次に、日野山の閑居生活の中で、長明が和歌と音楽に興ずる様子を描写した箇所を、以下に引用したい。

①若、跡ノ白波ニ、コノ身ヲヨスル朝ニハ、岡ノ屋ニユキカフ船ヲナガメテ、満沙弥ガ風情ヲ盗ミ、②モシ、桂ノ風、葉ヲナラスタニハ、潯陽ノ江ヲ思ヒヤリテ、源都督ノ行ヒヲナラフ。③若、余興アレバ、シバ〳〵松ノ響キニ秋風楽ヲタグヘ、水ノ音ニ流泉ノ曲ヲアヤツル。

「若」（もし）を繰り返しながら、①と②では、朝と夕の時刻、和歌と琵琶の芸能が、また③では松風と流水の音、「秋風楽」と「流泉」という箏と琵琶の曲名が対置されており、ここにも和歌や漢詩文、数奇説話などを典拠とした美文調の対句表現を見ることができる。

まず「満沙弥ガ風情ヲ盗ミ」に関して、『発心集』巻六ノ九話は「和歌はよくことわりを極むる道なれば、これによせて心をすまし、世の常なきを観ぜんわざども、便りありぬべし」として次の逸話を載せる。初めは「和歌は綺語のあやまり」と否定していた源信が、比叡山から湖上の舟の通り過ぎるのを見て、沙弥満誓の「世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎ行く舟の跡の白波」（『拾遺集』哀傷）という無常の歌を思い出し、和歌と仏道との一致を悟ったという。岡の屋の「美景」に満誓の「古歌」を思い起こしつつ、長明も詠歌することで「心澄む」状態が生じ、源信の如く無常の道理を感得しえたというのである。

これに続く「源都督ノ行ヒヲナラフ」は、江州に左遷された白楽天が「琵琶引」を作った潯陽江に思いを馳せながら、大宰権帥の赴任中に九州の地で没した、桂流琵琶の名手、桂大納言源経信に倣って琵琶を弾くことを意味する[12]。日野山中の草庵の描写が、白楽天の江州左遷時代に書かれた『白氏文集』巻二十六「草堂記」や『源氏物語』須磨巻における光源氏の謫居を踏まえていることはすでに指摘されており[13]、この場面でも、長明は都からの流離の先

例として白楽天と源経信の二人を挙げたのであろう。

そこで、『白氏文集』巻十二「琵琶引并序」に基づき、それを和文の歌説話に翻案した『唐物語』第二話の結語を見るに「この人は、世中の人の心のみな濁れるを憂しとや思ひけん、ひとりすまして、常は都に跡をなんとゞめざりける」[14]とある。ここでは、沈淪して商人の妻となった女と自身の憂愁を重ね合わせた白楽天の「世中の人の心のみな濁れる」とは対照的な、「都」[15]を拒絶して生きる孤高が「ひとりすまして」と強調される。さらに、『唐物語』の随所に見られる和歌的表現や脱俗精神の背景として、長明の和歌の師俊恵主宰の歌林苑の場が想定され、実際、作者とされる藤原成範と歌林苑の歌人らとの密な交渉も窺いうるという。[16]とすれば、長明のごく身近な周辺で、都から疎外された白楽天の「心」の清澄なイメージが確立しており、それを『方丈記』が巧みに取り込んだのであろう。

また、第二話冒頭の「むかし元倭十五年の秋、白楽天罪なくして江州といふ所に流されぬ」から直ちに想起されるのは、『発心集』巻五ノ八「中納言顕基、出家・籠居の事」の源顕基である。常に白楽天の詩を口ずさみ、「朝夕琵琶をひきつつ、「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」と願った顕基に「琵琶引」の世界が意識されているのは明らかである。これらの説話では、無実の罪による配流という、我が身の不遇を甘受しようとする精神が、厭世的かつ清廉な生き方と見なされ、数奇の理想として語られる点が重要である。[17]

次に「源都督」経信は、俊恵の祖父であり、長明は桂流の琵琶を音楽の師中原有安から習得していた。[18]そんな長明の敬愛する経信の琵琶に関する数奇説話に、『古今著聞集』巻十九「大宰帥経信任官下向の途、筑前筵田の駅にして、館前の槻を伐りて観月の事」がある。

経信卿、大宰の帥に任じて下向の時、八月十五夜に筑前の国筵田駅につきたりけるに、天晴れ、月あきらかなるに、館の前におほきなる槻ありけり。枝葉ひろくさしおほひて月をへだてければ、人をめしあつめて、たちまちにその木をきりはらはせて、月にむかひて夜もすがら琵琶をかき鳴らして心をすまして、天あけぬればたたれけり。かかるすき人もいまはなき世なりけり。[19]

太宰府に下向する途中の筵田駅において、経信は中秋の名月を眺める邪魔になるからと、宿所の前の槻を伐るように命じたという。ここでも、筑前国で「月」に向かって琵琶を弾く経信の姿が「心をすまして」と表現されており、その「すき人」としての姿は『発心集』の「配所の月を見ばや」という顕基の願いが具現化したものと見なせよう。『方丈記』において、長明がことさらに大宰帥の唐名「都督」と表記することを考えると、経信についても、都から遷任

された者の「心」の清澄性が意識されており、こうした記述が右の説話の如き風流の士としての経信像につながる一端になったと考えられる。

また『方丈記』引用箇所③の「松ノ響キ」は、これも「琵琶引」を踏まえる『源氏物語』明石巻に「広陵といふ手をあるかぎり弾き澄ましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり」[20]と見え、都を去った光源氏が明石の浦で琴を弾ずる場面に「松の響き」が用いられていた。その後、薄雲巻の冷泉帝と夜居の僧都との会話において、光源氏の須磨流謫が「事の違ひ目ありて、大臣横さまの罪にあたりたまひしとき」と回顧されるけれども、長明もまた『方丈記』の自伝的叙述の中で「ヲリ〳〵ノタガヒメ」つまり人生の蹉跌の結果、都から疎外されることになったと述べている。[21]

このように『方丈記』後半の閑居生活の描写は、長明の敬仰した数奇者たち、それも左遷の地で「琵琶引」を書いた白楽天や太宰府に没した源経信、「配所の月」を願った中納言顕基、須磨・明石を流離した光源氏など、みずからの不遇を甘受して生きた人々を想起させる重層的な叙述となっていた。度重なる「タガヒメ」の果てに遁世し、日野山中の草庵に生きる長明にとって、都から流謫された先人たちの系譜に連なることは、先に『発心集』巻六ノ九話の説示で見た「人の交はりを好まず、身のしづめるをも愁へず」「世の濁りにしまぬを事とすれば」という数奇の理念にも合致する。

四　美文を〈書く〉ことの意味

以上、『方丈記』後半の草庵生活は、和歌の伝統的表現や『白氏文集』をはじめとする詩文、数奇説話や物語文学などの複雑な織りなしによって書かれていた。長明は後鳥羽院歌壇において習得した本歌取りの手法を仮名文の「記」に応用し、先行文芸の世界を二重写しにすることで、[22]自己の感得した閑居の情趣をより印象深く表現してみせたのである。しかも、それはただ長明の文学的教養を披露するだけが目的ではなく、遁世者として仏教的観想に到達し、敬仰する数奇者たちと結びつくための重要な回路ともなっていた。本文に直接「心澄む」とは表現されないものの、草庵の四季や数奇生活を美文で書く営みは、長明自身の「心」の浄化を意図したものでもあったわけである。

これに対し、『方丈記』前半における五大災厄の記事の中で、都の住人たちの「心」はどのように描き出されているのであろうか。

①人ノイトナミ、皆愚カナルナカニ、サシモアヤウキ京中ノ家ヲ造ルトテ、宝ヲ費シ、心ヲ悩マス事ハ、スグ

レテアヂキナクゾ侍ル。　（安元の大火）

②世ノ乱ル、瑞相トカキケルモシルク、日ヲ経ツ、世中浮キ立チテ、人ノ心モヲサマラズ。民ノウレヘ、ツヰニ空シカラザリケレバ、同ジキ年ノ冬、ナヲコノ京ニ帰リ給ヒニキ。　（福原遷都）

③スナハチハ、人皆アヂキナキ事ヲ述ベテ、イサヽカ心ノ濁リモウスラグト見エシカド、月日重ナリ、年経ニシノチハ、事バニカケテ言ヒイヅル人ダニナシ。　（元暦の大地震）

①は、安元の大火の結論部分で、これほど危険な都の中の家を造るために、「宝ヲ費シ、心ヲ悩マス事」は、非常に愚かであると批判する。②は、一旦は新都に定められた福原から平安京への還都の顛末を述べたもの。新都建設の難航と風俗の激変が、世の中を不穏にし、人心の不安や混乱を招いたことを「人ノ心モヲサマラズ」と記している。③は、大地震の結論部分で、その当時は、誰しも世のむなしさを述べて、少しは「心ノ濁リ」も薄らぐかと見えたけれど、年月を経ると、それを口にする人さえいないという。ここでは、災害の恐怖をいつの間にか忘却してしまう人間の軽薄な「心」が鋭く指摘される。

以上の用例から、災害の集中する都にわざわざ家を構えて暮らすことは、まさに「仮ノ宿リ、誰ガ為ニカ心ヲ悩マシ、何ニヨリテカ目ヲ喜バシムル」ということに外ならないのであった。その認識は、長明が洛北大原に遁世するまで、都で過ごしてきた自己の生涯の大半を「スベテ、アラレヌ世ヲ念ジ過グシツヽ、心ヲ悩マセル事、三十余年也」と総括し、述懐していることとも重なるだろう。

つまり、大火や辻風などの災害を叙事的に記録した『方丈記』前半は人々の「心」の荒廃した世界であるのに対し、日野移住後の草庵生活を抒情的に表現した『方丈記』後半は「ヒトリ調ベ、ヒトリ詠ジテ、ミヅカラ情（コヽロ）ヲ養フバカリ」という、長明の理想とした「心」の清澄な世界であった。このように『方丈記』では、居住者の「心」を軸として、都と草庵それぞれの世界が対句の如く構成されている。長明にとって、美的修辞を駆使して「閑居ノ気味」を書くことは、災害と苦悩に満ちた都の状況を「濁悪世」として描き出したのとは対照的に、草庵世界を極楽浄土へ向かって開かれていく聖なる空間として位置づけることを意味していた。

では、叙事と抒情という異なる二つの側面を見せる『方丈記』前半と後半の文章表現は、果たして分断されているのであろうか。長明の著した歌書『無名抄』「仮名筆」は、古人の教訓として、仮名で文章を書く場合、歌の序文は『古今集』を、日記は『大鏡』を、和歌の詞書は『伊勢物語』と『後撰集』を、物語は『源氏物語』を手本にすべきであるとした上で、次のように記している。

いづれも〳〵構へて真名の詞を書かじとするなり。心の及ぶかぎりはいかにもやはらげ書きて、力なき所をば真名にて書く。……又、詞の飾りを求めて対を好み書くべからず。わづかに寄りくるところばかりを書くなり。対をしげく書きつれば真名に似て、仮名の本意にはあらず。これはわろき時の事なり。[23]

ここでは、漢語の使用をさし控え、できる限り柔らかな和文調で書くこと、また、対句の乱用は漢文に似て、仮名文で書く本来の意味が失われてしまうことを説いている。この記述から見て、『方丈記』の文体は、対句を多用する点で「仮名の本意」に反しているといわざるをえない。しかし、『方丈記』が「記」の文体を踏襲するということは、漢文に馴染みの深い対句を文章の骨子に据えることであり、その形式の中に、長明は歌語や和歌的発想を大胆に取り込んだのであった。確かに、『方丈記』は前半と後半で叙事と抒情という対照的な性格を見せるけれども、作品全体の文章表現は「仮名文の対句」に統一されていると考えるべきである。和文の伝統を乗り越えて、それ以前にはない和漢混淆文により草庵生活の楽しみを描き出した点に、長明の表現者としての文学的達成があった。

五　おわりに

最後に、『方丈記』後半から「山中ノ景気」とその情趣を描いた一節を引用し、長明の開拓した美文調の文体が後の文学作品に与えた影響について見通しを述べたい。

若夜シヅカナレバ、窓ノ月ニ故人ヲシノビ、①猿ノ声ニ袖ヲウルホス。クサムラノ蛍ハ、遠ク槙ノ篝火ニマガヒ、②暁ノ雨ハ、ヲノヅカラ木ノ葉吹ク嵐ニ似タリ。山鳥ノホロト鳴クヲ聞キテモ、父カ母カト疑ヒ、峰ノ鹿ノ近ク馴レタルニツケテモ、世ニ遠ザカルホドヲ知ル。或ハ又埋火ヲカキヲコシテ、老ノ寝覚ノ友トス。ヲソロシキ山ナラネバ、フクロフノ声ヲアハレムニツケテモ、山中ノ景気折ニツケテ尽クル事ナシ。

諸注によれば、傍線部①が「巴猿三叫、暁行人の裳を霑ほす」（『和漢朗詠集』大江澄明）、傍線部②が「時雨かと寝覚の床に聞ゆるは嵐にたへぬ木の葉なりけり」（『山家集』）を踏まえた表現とされ、[24]その他にも、ここは『堀河百首』や『玉葉集』に見える伝行基歌などを下敷きとして、草庵生活の夜の情景とその寂寥感を抒情的に描き出している。

そして、右に見たような『方丈記』における美文の表現は、九条道家の兄慶政により書かれた、承久四年（一二二二）成立の仏教説話集『閑居友』に継承されたと考えられる。

かゝる数にもあらぬ憂き身にも、松風を友と定め、白

雲を馴れ行くものとして、ある時は、①青嵐の夜、すさましき月の色を眺め、ある時は、長松の暁、さびたる猿の声を聞く、ある時は、②訪ふかとすれば過ぎて行くむら時雨を窓に聞き、ある時は、馴るゝまゝに荒れて行く高嶺の嵐を友として、窓の前に涙を抑へ、床の上に思ひを定めて侍るは、③何となく心も澄み渡り侍れば、それをこの世の楽しみにて侍るなり。[25]

右の引用は『閑居友』の最終話である下巻第十一話において、慶政がみずからの草庵生活に言及した箇所で、傍線部①が「暁、長松の洞に入れば、巖泉咽んで嶺猿吟ず。夜、極浦の波に宿すれば、青嵐吹いて皓月冷し」（『和漢朗詠集』慶滋為雅）、傍線部②が「むら時雨過ぐれば晴るる高嶺より嵐に出づる冬の夜の月」（『秋篠月清集』）を典拠とした表現である。[26]『方丈記』と『閑居友』のいずれも「猿ノ声」や「暁ノ雨」「むら時雨」など、共通の自然の景物によって山中の寂しさを効果的に描き出しており、さらに『閑居友』傍線部③には「何となく心も澄み渡り侍れば」と見える。

つまり、慶政は自身の感得した閑居の情趣を「心澄む」ものとして、和歌や漢詩句を踏まえた美文により表現することを『方丈記』の草庵生活の描写から学んだのではないだろうか。『閑居友』上巻第一話には「さても、発心集には、伝記の中にある人〳〵あまた見え侍めれど……」とあり、これはごく初期の『発心集』享受を示すものとして注目されてきた。慶政が『閑居友』の中で『方丈記』に言及する点はないけれども、『閑居友』下巻末尾の「その時は、承久四年の春、弥生の中の頃、西山の峯の方丈の草の庵にて、記し終りぬる」という自署は、『方丈記』末尾の「于時、建暦ノ二年、弥生ノ晦日コロ、桑門ノ蓮胤、外山ノ庵ニシテ、コレヲ記ス」という自署を強く意識して記されたに違いない。[27]

従来の研究では、院政期から中世における聖の文芸として、長明の『発心集』と慶政の『閑居友』、語り手を西行に仮託する『撰集抄』が仏教説話集という枠組みの中で分析、評価されることが多かった。しかしながら、『発心集』では、巻六ノ十二「郁芳門院の侍良、武蔵の野に住む事」のように和歌的発想に基づく抒情的な話は例外的で、むしろ長明が『方丈記』後半の草庵生活について、和歌や漢文の美的修辞を駆使して讃美したことが、高貴な女性に献呈されたという『閑居友』の美文に影響を与えた可能性が高い。さらにそれは『閑居友』を介して、隠遁への憧憬を感傷的なまでの美文で描き出し、遁世者の悟りの境地を「心澄む」の語を用いて繰り返し表現する『撰集抄』の説話の形成にも少なからず影響していると考えられるのである。

〈注〉

（1）大曽根章介「「記」の文学の系譜」（『日本漢文学論集　第一巻』

汲古書院、一九九八年）参照。

（2）『新編日本古典文学全集　十訓抄』（小学館、一九九七年）。

（3）『文学』五二―五、岩波書店、一九八四年五月、三三頁。

（4）『中世文学の構想』（明治書院、一九八一年）一七八頁。

（5）以下、『方丈記』の引用本文は、大曽根章介・久保田淳編『鴨長明全集』（貴重本刊行会、二〇〇〇年）所収の大福光寺本により、私に句読点・濁点を付し、漢字を宛てるなど、一部表記を改めた。

（6）『新日本古典文学大系　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年）。

（7）以下、『発心集』の引用本文は、『新潮日本古典集成　方丈記・発心集』（新潮社、一九七六年）による。

（8）以下、『法門百首』の引用本文は、『新編国歌大観　第十巻』（角川書店、一九九二年）により、一部表記を私に改めた。併せて、山本章博『寂然法門百首全釈』（風間書房、二〇一〇年）を参照した。

（9）『法門百首』一番歌の左注について、錦仁「和歌の思想――詠吟を視座として」（『院政期文化論集第一巻　権力と文化』森話社、二〇〇一年）二五三頁は「「すまして見る」とは、そのように美しい風景を、経典の奥深い哲理のあらわれとして見つめる観想のことだろう」と指摘する。

（10）この点は、山本章博「宗教テクストとしての寂然『法門百首』」（『日本における宗教テクストの諸位相と統辞法』名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八年）に指摘がある。その他、『法門百首』と『方丈記』との関連については、山田昭全「鴨長明の秘密（下）」（『大法輪』四四―一〇、一九七七年十二月）、木下華子「『方丈記』が我が身を語る方法」（『国語と国文学』八九―五、二〇一二年五月）に詳しい。

（11）嵯峨本をはじめとする流布本系諸本の末尾には、源季広の「月かげは……」の歌が記されているけれども、これは後人の手になる書き入れである。

（12）簗瀬一雄『方丈記全注釈』（角川書店、一九七一年）二一三頁は、古辞書に「楓」を「カツラ」と読んだことから、「琵琶引」詩中の「楓葉」と『方丈記』の「桂ノ風、葉ヲナラス夕ニハ」は無縁ではなく、この「桂ノ風」が「潯陽江」を呼び出し、それらが琵琶を弾く「源都督ノ行ヒ」に縁語的に連なっていくという。

（13）浅見和彦「鴨長明――妄執をめぐって――」（『国文学　解釈と鑑賞』六四―五、一九九九年五月）は、『方丈記』の庵室の描写が『源氏物語』の光源氏の須磨の寓居に類似する点を取り上げ、両者が『白氏文集』「草堂記」の影響下にあると指摘する。

（14）『唐物語』の引用本文は、池田利夫『唐物語校本及び総索引』（笠間書院、一九七五年）所収の尊経閣文庫蔵本により、私に句読点・濁点を付し、漢字を宛てるなど、一部表記を改めた。

（15）『唐物語』第二話の話末評語について、小峯和明「『唐物語』の表現と藤原成範」（『院政期文学論』笠間書院、二〇〇六年）八四九頁は「特に罪なくして配所におもむき、流謫の身に沈む姿を、意識的に都を遠ざけた退隠の文脈にとらえ返していくところに、成範の読みの指向がうかがえる」とする。

（16）注15前掲書所収、「『唐物語』の表現形成」八三二頁に「『唐物語』の形成は……院政期における和歌講釈や歌論義など歌学の隆盛や歌壇の活性化、具体的には歌林苑の場などと密接にかかわる」、「『唐物語』の表現と藤原成範」八五六頁に「特に登蓮ら歌林苑

の特色とされる「すき」の精神は、成範にも濃厚にうかがえよう」とある。

(17) 『発心集』の顕基説話については、今村みゑ子「『発心集』顕基説話の琵琶――長明の情念――」(『鴨長明とその周辺』和泉書院、二〇〇八年)に詳しい。また、顕基が「心澄む」存在として白楽天の「琵琶引」とともに享受されていたことは、『撰集抄』巻四ノ五「顕基卿事」に「罪無して、配所の月を見ばやと願給けん、げに〳〵哀に侍り。元和十五年の昔思出されて、心の中、そゞろにすみても侍るかな」とあるのが参考となる。

(18) 『発心集』巻六ノ九話では、経信の琵琶の師源資通が、全く通常の修行はせず、毎日持仏堂に入って琵琶を弾き、それを極楽に廻向したという。桂流琵琶の系譜に連なることは、長明が数奇と仏道を結びつけ、自己の往生を願う上でも重大事であった。

(19) 『新潮日本古典集成　古今著聞集下』(新潮社、一九八六年)。

(20) 以下、『源氏物語』の引用本文は、『新編日本古典文学全集　源氏物語②』(小学館、一九九五年)による。

(21) 『方丈記』と光源氏の須磨退去との関わり、薄雲巻における「違ひ目」の用例については、注10前掲「『方丈記』が我が身を語る方法」に詳しい指摘がある。

(22) 加賀元子「略本方丈記の表現」(加賀元子・田野村千寿子『真字本方丈記』和泉書院、一九九四年)二六一頁は「広本の修辞は、縁語や本歌取り的手法を活用させており、その背後に引用した古歌・故事漢文典籍のもつ世界を重ねて二重写しの効果を出している。おそらくは、長明が和歌所寄人として加わった後鳥羽院歌壇から得た表現方法の一つではなかったか」と指摘している。

(23) 『無名抄』の引用本文は、小林一彦校注の『歌論歌学集成　第七巻』(三弥井書店、二〇〇六年)による。

(24) 注12前掲『方丈記全注釈』、『新日本古典文学大系　方丈記』(岩波書店、一九八九年)などを参照した。

(25) 『閑居友』の引用本文は、『新日本古典文学大系　閑居友』(岩波書店、一九九三年)により、一部表記を私に改めた。

(26) 注25前掲『新日本古典文学大系　閑居友』脚注参照。

(27) 注17前掲書所収、「略本・流布本『方丈記』をめぐる――一条兼良のこと、および享受史――」八八頁に「『閑居友』には名前こそないが『方丈記』と『池亭記』の関係以上に、仮名の自署として『方丈記』の表現との重なりが見られる。……『閑居友』がことさら「方丈の草の庵」とするのは、『方丈記』が自明なこととして自署に記さなかった、その長明の方丈の庵を意識したものではないかと思われる」とある。

(おかやま　たかひろ)